



## ◆大学図書館問題研究会京都ワンディセミナーのご案内◆

### テーマ「館種を越えた図書館協力」

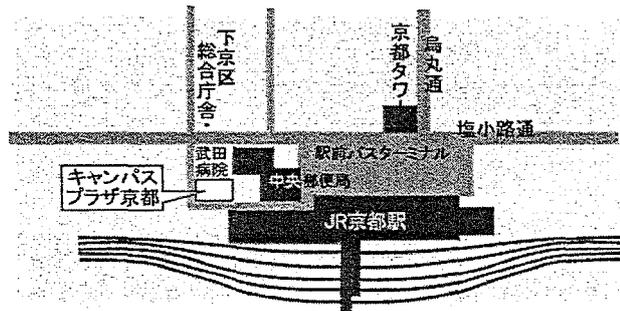
- ・日時 4月29日(木・祝日) 13:30~16:40 (13時より受付開始)
- ・場所 キャンパスプラザ京都 第4講義室(4階/90名収容)  
京都市下京区西洞院通塩小路下ル(JR京都駅ビル駐車場西側・京都中央郵便局西側)  
<http://www.consortium.or.jp/campusplaza/index.html>

- ・報告者: 河原茂記(京都府立図書館資料課)  
大館和郎(京都学園大学図書館)  
小河富代(京都市立太秦小学校)

#### ・スケジュール

13:00	受付開始
13:30-14:10	第1報告
14:10-14:50	第2報告
14:50-15:10	休憩
15:10-15:50	第3報告
15:50-16:40	質疑応答

- ・参加費 500円



- ・申込方法および内容については2ページをご覧ください。

※セミナー終了後、懇親会を予定しています。

※大図研の会員でない方のご参加もお待ちしています。

## [目次]

大学図書館問題研究会京都ワンディセミナーのご案内	...	1
大図研京都数珠つなぎ 第70回 脇阪 暁	...	2
図書館職員40年 西川 慈子	...	4
京大図書館史こぼれ話 その八 廣庭 基介	...	5
会費納入のお願い	...	6

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたはURLへお寄せください。

電子メール: [dtkk@rg7.so-net.ne.jp](mailto:dtkk@rg7.so-net.ne.jp) (大学図書館問題研究会京都支部)

URL: <http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

## 大学図書館問題研究会京都ワンディセミナー申込方法および内容

◆参加申込：4月22日(木)までに(1)氏名、(2)所属、(3)懇親会参加の有無を記入の上、下記までお申込下さい。

・京都支部 Web サイトからのお申し込みは

[http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/news/seminar2004\\_1.htm](http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/news/seminar2004_1.htm) から

・郵送、FAX、電子メールでのお申し込みは、支部長 大館和郎(京都学園大学図書館事務室)

TEL 0771-29-2292 FAX 0771-29-2299 E-mail [odate@kyotogakuen.ac.jp](mailto:odate@kyotogakuen.ac.jp)

〒621-8555 京都府亀岡市曾我部町南条大谷1番地1 まで

◆問い合わせ先：上記 大館まで

◆内 容：

現在、公共図書館、大学図書館、学校図書館など館種を越えた図書館協力が各地で実施されるようになってきています。今回のセミナーではこのような様々の館種がそれぞれの長所を生かしつつ、足りないところを互いに補いながら、多様な協力関係を築いていける道筋を考えていきたいと思えます。そのことを考えるきっかけとなる個別事例として、京都府立図書館総合目録ネットワーク(K-Libnet)を通じての相互貸借圖書の物流を担う連絡協力車の話(府立図書館からネット参加館への貸出業務の面から)から始め、大学図書館の本がこの物流網に乗って一般市民の利用に供されるまでの話をからませています。また、教科学習を地域の公共図書館と連携しながら取り組んでいる太秦小学校の事例の報告を行ないます。

連載コーナー 大図研京都数珠つなぎ 第70回

## 佛教大学における中国書整理の現状

佛教大学図書館

わきざか あきら  
脇阪 暁 さん

はじめまして、佛教大学の脇阪と申します。今回、「数珠つなぎ」に初めて投稿させていただきます。私は、現在図書館に所属し、情報管理係で目録業務に従事しています。図書館での業務経験は今年で3年目となり、和書・洋書・中国書の3つに業務分担しているうちの中国書の整理を担当しています。本学図書館において中国書の冊数に占める割合は大きく、また文淵閣四庫全書や統修四庫全書、四庫全書存目叢書など四庫全書関係を始めとする大型コレクションや個々の古典籍もかなり充実しているため、そうした蔵書構成を生かすべく、他大学ではあまり行われていない特色ある整理を行っていますので、そのことを自己紹介も兼ね、この場でご紹介させていただきたいと考えています。

さて、佛教大学では、新規の中国書を学内全体で年間に約4,000冊受け入れています。それらをNacsisデータベースへ書誌所蔵登録する一方、主業務として、中国書の中でも古典籍に属する、いわゆる漢籍の整理に力を入れています。漢籍の整理は、データ入力ではなく、手書きのデータシートを作成し、漢籍独自の分類法を用いて配架するまでの一連の作業を行っていま

す。その中には和漢書コーディングマニュアルに示された、いわゆる 19 世紀以前に出版された木版本や活字印本が数多く含まれ、従来は整理を出来る人材がいなかったため、多くが未整理図書となっていました。平成 13 年度から漢籍整理の専門家と共に、通常の受入図書の整理と同時並行で整理を行っています。今年でちょうど 3 年目になり、多忙を極めた初年度に比べると、現在は業務も落ち着きを見せはじめ軌道に乗りつつあります。

さて、本学図書館での図書の整理の仕方を簡単に述べますと、先程少し触れましたように、まず、図書を和書と洋書及び中国書の三種類に資料区分して分担整理しています。中国書は通常和書に含めて整理する図書館が多いと思うのですが、中国書という一つの区分を別に立てています。これは、本学の蔵書数に占める中国書の割合が非常に大きいということが要因として挙げられ、大きな特徴となっています。更に、中国書を内容によって漢籍と新学書の二つに区分して整理しています。なぜ、分けるかと言いますと、学問の歴史から中国を見た場合、主に 19 世紀以前の西洋近代化の影響を受けていない前近代と、近代化を遂げていく 20 世紀以降とでは著作の内容や思想に性質上大きな違いがあり、両者を一緒くたにして整理配架してしまうことは、中国学を専攻する人間にとっては非常に使いづらく、是非漢籍は通常の図書とは別に整理配架してほしいという要望があったためであります。そこで、我々は漢籍と新学書とを次のように定義しました。

まず、漢籍は、漢民族が前近代の思想体系によって漢文（古典漢語）で書いた書物、次に新学書は近代的な思想体系によって書いた書物と解釈しています。従って、出版年や装丁による区別はしていません。ここが Nacsis の和漢書マニュアルに記載された漢籍の定義とは全く異なる部分であり、それぞれ整理も全く違う方法で行っています。漢籍は京都大学人文科学研究所が採用している四部分類法、新学書は十進分類法に基づいて整理しています。この方法は本学で所蔵する中国書全てについて適用しており、それぞれ内容が漢籍か新学書かを、まず職員が判断の上、棚分けしてから処理を行っています。私は、その中の漢籍の整理を主に担当しています。平成 13 年度から、未整理となっていた中国書も含め全てこの方法で整理しており、現在数万冊の漢籍を四部分類によって配架しています。では、漢籍整理で行う四部分類というのは、一体どのような分類法なのかを簡単にご説明したいと思います。

四部分類は、前近代の中国で 1,000 年以上にわたって続けられてきた伝統的な図書分類法で、18 世紀清朝乾隆帝時代の四庫全書編纂によって一応の到達点を見ました。四部というのは経部（儒家の基本経典などを収める。易、書、詩、禮、春秋など）、史部（歴史書を収める）、子部（諸子百家などの思想書を収める）、集部（文学書を収める）の 4 つを指し、これに現在では叢書部（四部の書の一つにまとめた叢書の類）を加え五部分類とするのが一般的です。まず、京都大学人文科学研究所の漢籍分類目録に倣い、手書きのデータシートの作成（記述項目は、書名・巻数・撰者・出版事項・分類）を行い、分類に従って書架に並べていきます。同一分類の図書は著者の生卒年順に排列するという極めて専門的な方法を用いていますので、書誌作成から配架作業まで全て一人の職員が行っていくこととなります。現在、経部から整理を始めて叢書部まで一応完了しました。ただ、唐本和本を中心に 19 世紀以前の線装本が多く、また、リプリントであっても底本記述の無い本もあり、書誌の確定には今後更に時間を要します。現在、未整理の図書の整理が終わりに近づきつつありますが、これ以外にも、漢籍は、内容によって判断しますので、新規で受け入れた中国書についても漢籍と新学書とに分けており、未整理と新規とを同時並行で行っています。今後は、それをどのようにデータ化し、利用者へ円滑に提供していくかが課題になってくると思います。

## 図書館職員 40 年

西川 慈子

図書館職員としての40年を少しだけ振り返ってみようと思います。京都大学で35年、国際日本文化研究センターで5年、20歳で京都大学宇治構内にあった工業教員養成所（もうあまり知っている人もいないかと思いますが、8年の時限付き設立の機関でした）図書室に勤務してから40年が過ぎ去ろうとしています。長かったような、あっという間だったような気がします。思えば図書館員としての心構えも何もわからず、中学校で図書委員としかしていただけた本が好きで、初出勤の日は何を着せて出勤させましょうかと、今は亡き母が事務長に電話したくらいに世間知らずの娘でした。それがまあ、60歳だなんて。工業教員養成所の図書室は森島さんというおじさまとの二人職場で、利用者対応専門、それもほんの少しの利用者だったし、同年代の学生ばかりだったからお気楽図書館員で、まだ学生気分いっぱい楽しい楽しい図書室でした。それが昭和43年に附属図書館へ配置換えとなったとき、カルチャーショックでした。たくさんの図書館員がてきぱきと働き、次々と仕事をこなしておられ活気が違いました。うわあこれが京都大学の図書館なんだと思いましたね。だから異動していろんな図書室を知ること、その中で働いてみることに、他大学の図書館を知ること、その中で働いて見ることに本当に大切です。自分というものを知ることになります、本当に！！ ちょっと昔の図書室員のように、就職したところで40年一筋に働くのは意欲を摘んでしまうようなものだと思います。

附属図書館では受入掛の仕事が一番長かったのですが、予算が10倍に増えた時期は大変でした。学術情報センター（現在の国立情報学研究所）に入力を開始し始めたときの目録掛にもいたのですが、暗中模索の入力業務はトラブルも多かったけど機械が苦手だった私には良い勉強でした。そういえば新館の建設と同時くらいに業務機械化が取り組み始められたのですが、これも勉強になりました。富士通のSEにあきれられながらもワイワイと深夜までのディスカッションをやりながら、取り組んでやっていたのは、ある意味楽しかったです。

サービス関係業務としては教養部図書館での参考調査掛や附属図書館の資料運用掛が経験ですが、利用者との直接のかかわりは楽しいものでした。開館時間の延長や日曜日の開館、その中で土曜日の職員による交替勤務などかけがえの無い経験をつんで来られたと思っています。教養部時代には掛長として図書系以外の職員との交流や仕事を一緒に取り組んだことが、私の中には大きなネットワークとして残っています。図書系職員だけで固まるのではなく、いろんな職種の人たちと取り組むことがとても重要だと学びました。

国際日本文化研究センターでの5年間も冊子体目録の作成、外国での研究会への参加、研究者との直接の交流など、35年間の京都大学図書館とは違う側面を学ぶことができました。なにより桂の山々に囲まれての図書室生活は替えがたいものでした。

このような40年間の図書館員として生きてきた中で、大学図書館問題研究会に入れていただいたのはずいぶん後でした。毎日の仕事と生活、子育てに追われていて、研究会なんて私には無理と諦めていました。何度かのお誘いを受けているうちに大学図書館問題研究会に入りましたが、全国大会へ参加しての衝撃は大きかったです。附属図書館へ異動したときに受けたショック以上に、全国にこんなにたくさんの仲間たちが大学図書館のことを真剣に考え、行動し、愛してはるんやと思ったのです。本当にずばらな研究会員でしたが全国大会へ参加するたびに皆さんの熱気と健気さに勇気づけられました。図書館でおこっている問題を大会分科会等で訴えると共感していただいたり、解決へのアドバイスをいただいたりしました。参加している方

たちの人柄に惚れ込んでしまいました。また、その頃の全国大会で毎回開催されていた「みゆき研究会」や「地酒の会」は楽しかったですね。怖いと思っていた先生たちとわあわあしゃべられて。図書館学という学問は確かにあるでしょうが実践の支えとなる学問でなければ意味がないと思っています。その実践を支えているのが大学図書館問題研究会の活動でしょう。事務局が関西から関東へ移ってしまっているいろんな催しが遠のいてしまったように感じ、あまり参加もしていません。ごめんなさい。

今、京都大学を去るにあたって思うことは、図書館で一番大切なことは「利用者に私たちが何ができるか」ではないでしょうか。利用していただき、お役に立ちたいという心ではないでしょうか。そのようなセンスを忘れてしまった図書館員を時々見つけてしまうのはとても残念です。これからも大学図書館問題研究会としてどんどん会員を増やしてください。みなさま、ありがとうございました。いったん幕を引きましょう。

にしかわ ちかこ (京都大学附属図書館)

## 京大図書館史こぼれ話 その八

### 京大初代図書館長島文次郎博士と「老いらくの恋」事件

廣庭 基介

#### 部外者による島樫乃夫人の人物評 1 : (前号よりつづく)

昭和二十三、四年といえ、戦後の残滓が巷に溢れ、人は食べることだけにあくせくしたころだ。そんな時世に先生は、訪ねる若い学生には、季節の香りのする手料理をご馳走してくださった。

「季節は香りからやってくるんですよ」ときかせてくださったが、ひもじさに喘ぐ私たちは、そんな味わいのあるお言葉に耳を傾けようともせず、食欲を満たそうとすることに、心は一途に走った。そのころの先生は薄給と聞いていたが、春は菜の花粥、初夏には麦飯の笹ずし、秋には甘藷のすいとんと準備してくださった。今思えば決しておいしい味ではなかった筈だが、あの色、香り、まるやかな舌触りが、年経るごとに鮮明になって来る。

(未完ママ)

さらさらと静かな幽谷を走る溪流を思わせる名文である。一字一句に恩師敬慕の温かい心情のこもるこの文を読んでいて、師道は高遠にして尊厳、師弟の絆は永遠に切れるものでないと、明けて九十歳、この年になって、長夜の迷妄からよび覚められた思いに浸っている。樫乃さんと中西さんの師弟のむすびつきの仕合わせをいつまでも祝福していた。(中略)

三十余年間教壇に立たれ、北陸の数多く教え子を育まれた中西さんは、樫乃さんからうけた心を心としその心を幼い子の心に移し、それがすこやかに根づいて育っていったものと思う。樫乃さんのやさしい情愛で育まれた教えの芽生えは、やがて美しい花を咲かせ、実を結び、加賀の上にその実が落ちて、また新しい芽を吹き出しては生まれ、新しい教えの花が咲いて、数多くの実が結ばれる。(後略)】

#### 部外者による島樫乃夫人の人物評 2 : 第三高等学校名誉教授阪倉篤太郎氏の評

島樫乃夫人に関する人物評の2番目は旧制第三高等学校、京都大学教養部教授、京都女子大学教授を歴任した阪倉篤太郎博士が同夫人の遺歌集『芳梅』によせた序文中の文章です。

【「樫乃さんは三十歳に満たずして夫君に先立たれ、幼い遺児（ママ高井一郎君）を抱きつゝ、勉学の意を決して京都女子専門学校（ママ国文学科）に入学し、大正十二年卒業の後、中等教員資格試験に合格して母校附属の京都女学校に教職を奉じた。昭和の初に島文次郎博士と結婚して再び家庭の人となったが、同二十年博士の永眠に遭ひ寡居十年の後、病のために大學病院に入院中急に他界した。性質極めて純真、事を処するに誠実で、生徒の指導にも同窓会副会長の役務にも、全力を尽くして敢て労を惜しまなかつた。私どもも家庭的に親しく往来して約四十年に及ぶので、その思出話が今に絶えない。（後略）

以上、読者の皆さんから「もう結構、もう飽きた」と辟易されるくらい、くどくどと京大初代図書館長島文次郎先生の奥さんである樫乃氏に寄せられた人物評と、「老いらくの恋」で一世を風靡した川田俊子氏の樫乃氏に対する眼差しを吐露した自筆の文章を御紹介して参りました。それは、自分の死後15年も経ってから、一方的に、生前における川田順への態度について、色目を使ったとか、何らかの感情がこもっていた、などと川田俊子氏から非難がましく書かれた故島樫乃氏には、死人に口なしで、一言の反論もすることが出来ず、云われっぱなしという不公平な状況に陥れられている訳ですから、この際、不肖私が泉下の島樫乃氏に代わって、同氏に寄せられていた、積極的で高い評価を引用して記した次第です。

樫乃氏が、いそいそと背広の上着を川田順の肩に着せかけたり、送り出そうとする川田順に上着を着せ掛けるくらいの、誰も違和感を抱かなかつたに違いない行為を、川田俊子氏は非難がましく書きたてましたが、考えてみれば、その場に御亭主の島博士も居たのであり、何よりも、島博士邸に於いて、樫乃夫人が主宰者となつて行われていた勉強会であつた上に、その樫乃夫人こそが、その会への俊子氏の出席を薦めて呉れた恩人でもあつたと自ら認めていながら、どうしても、川田順の気持ちに自分だけに向いていたのだ、と恥も外聞もなく声高に主張する川田俊子氏という人の特異な性格のために、当時の日本社会の相当部分が振り回されたのでした。こういうのを典型的な「下司の勘ぐり」と呼ぶのではないのでしょうか。

何と、「老いらくの恋」事件を題材とした『虹の峠』の中で著者・辻井喬が書いた文章の方が、川田俊子氏の文章よりはるかに穏やかで品格が高いのですから驚きます。（次号へつづく）

ひろにわ もとすけ（元京大図書館員）

#### ◆◆◆会費納入のお願い◆◆◆

早春の候、会員の皆様におかれましてはご健勝のことと存じます。毎号、大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしていますが、残念ながら会費の納入率は依然として思わしくない状況にあります。

会費納入率の低下は大図研の活動に影響を与えるだけでなく、支部セミナーなどにも悪影響を及ぼします。既に新会計年度に入っていますので2003年度の会費納入をお願いします。

またすでに2002年度（大図研会計年度2002.07～2003.06）は終了していますが、納入率は六割程度です。納入いただいていない会員の皆様におかれましては、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願いいたします。

記

大学図書館問題研究会会費	¥5,000
京都支部会費	¥2,000
合計	¥7,000

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員にことづけていただきますようお願いいたします。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904

大学図書館問題研究会京都支部

ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部 dtkk@rg7.so-net.ne.jp までお願いいたします。